

# 神 仏 無 量 寿 經

新屋三右衛門

本稿は霊界物語 67 巻第 5 章「波の鼓」にある神仏無量寿經です。この神仏無量寿經は言霊別命の化身である梅公別宣伝使がヨリコ姫達にハルの湖水を行く波切丸の上で音吐朗々と唱える「經文」で、神業經綸の神秘をもらすものです。

ここに現代語に直す試みをしてみました。どこまで正確か疑問ですが参考になればと思います。なお、物語の原本を載せると長くなるので現代語のみを掲載しました。また、読みやすいように 1～11.までに区切りを入れています。

## 現代語

(一)

第一神王伊都能売の大神の大威徳と大光明は最尊最貴にして諸神の光明の及ぶところにあらず。あるひは神光の百神の世界、あるひは万神の世界を照明するあり。要するに東方日出の神域を照らし、南西北、四維上下も亦復かくの如し。ア、盛んなるかな、伊都能売と顕現したまふ嚴瑞二靈の大靈光、この故に天之御中主大神、大国常立大神、天照皇大御神、伊都能売の大神、弥勒大聖御稜威の神、大本大御神、阿弥陀仏、無礙光如来、超日月光仏と尊称し奉る。

神の中の第一の王である伊都能売の大神の威厳や徳と慈悲の光は最も尊く最も気高く、諸神の光の到底及ぶ所ではない。伊都能売の大神の光は百神の世界や万神の世界を照らす。東方にある日の出の神域を照らし、また、南、西、北、東北、東南、西南、西北の四隅や上も下も総てを照らす。何と盛んなことか。伊都能売御魂と現われたまふ嚴瑞二靈の大靈光を称して、天之御中主大神、大国常立大神、天照皇大御神、伊都能売の大神、弥勒大聖御稜威の神、大本大御神、阿弥陀仏、無礙光如来、超日月光仏と様々に尊称申し上げるのである。

【神王】 神の中の神。〔仏〕 仏教とその行者を守護する神のこと。多く甲冑を着し、忿怒の相に描かれている。バラモン教やヒンドゥー教の神々を受容した結果、仏教を護る役割を持つこととなった神々のこと。毘沙門天などがそれである。

【威徳】 人を畏服させる威厳と人を心服させる徳。また、おごそかで冒しがたい徳

【光明】 明るく輝く光。〔仏〕 菩薩の心身から放つ光。智慧や慈悲を象徴する。

【四維】 艮（北東）・巽（南東）・坤（南西）・乾（北西）の四隅

【無礙光】 〔仏〕 何物にも妨げられない仏の発する智慧や慈悲の光。特に、十二光の一で、阿弥陀の光明。

(二)

それ蒼生にしてこの神光に遭ふものは、三垢消滅し身意柔軟に歡喜踊躍して、愛善の至心を生ず。三途勤苦の処にありて、この神の大光明を拝し奉らば、いづれも安息を得て、また一つの苦惱無く、生前死後を超越し、坐しながら安樂境に身を置き、天国の生涯を送ることを得べし。

人としてこの神の光に巡り会う者は貪欲、瞋恚、愚痴（貪瞋痴）の三垢を消滅して、身も心も解放されて和らぎ、喜んで躍りあがり、万物総てを愛しむ愛善の真心が生まれる。地獄道、畜生道、餓鬼道の三途の世界にいても、この神の大光明を拝むなら（に出会うなら）、みな安息を得て一つの苦悩も生じないし、生前死後の区別無く一切を超越して、居ながらに安樂境に身を置き、天国の生涯を送ることが出来る。

【蒼生】 あおひとくさ。人民

【三垢】 心身をけがす貪欲・瞋恚（しんい）・愚痴（ぐち）の総称。

【身意】 身体と心

【踊躍】 おどりあがること 信仰を得た歓びの表現。

【至心】 この上なく誠実な心。真心 まことの心。

【三途】 悪業をなした者が死後に赴く三つのあり方のこと。猛火に焼かれる火途（地獄道）と、互いに相食む血途（畜生道）と、刀・剣・杖などで迫害される刀途（餓鬼道）のこと。

(三)

この神の大光明は顕赫にして、宇内諸神諸仏の国土を照明したまひて聞こえざることなし。ただ吾が今その神光靈明を称へ奉るのみならず、一切の諸神諸仏、清徒声聞求道者縁覚諸々の宣伝使、諸々の菩薩衆、咸く共に歎称悦服帰順し玉ふこと亦復かくの如し。

この神の光明は明るく輝いて、天地の間の諸神諸仏の国土は照らされてその名の識らないところはない。ただ私だけが神の光をたたえるだけでなく、総ての神や仏、清徒や声聞、求道者、縁覚、多くの宣伝使や菩薩衆はことごとく褒め称え、心から喜んで従がわれるのであり正にその通りである。

【顕赫】 盛んに輝くさま。 【宇内】 天地の間。天下。あめがした。

【神光靈明】 神光は靈妙不可思議な光。 神体から発する光。 【清徒】 清らかな生活をする人か？

【声聞】 仏の説法を聞いて悟る人 【求道】 仏道を求めること。菩提・仏果を求めること

【縁覚】 師なくして十二因縁の法を觀じ、あるいは他の縁によって真理を悟った人。小乗の聖者

【嘆称・歎称】 感心してほめたたえること。 【悦服】 心からよるこんで従うこと。 【帰順】 反逆の心を改めて、服従すること

(四)

もし蒼生ありてその光明の稜威と洪徳を聞きて日夜称説し信奉して、至心にして断えざれば、心意の願ふところに随ひて、天国の樂土に復活することを得べし。諸々の宣伝使、菩薩、清徒声聞の大衆のために、共に歎誉せられてその洪徳を称へられ、そのしかる後に成道内覚を得る時にいたり、普く三界十方の諸神諸仏、宣伝使、菩薩のために、その光明を歎称せられむこと亦今の如くなるべし。ア、我が伊都能売の大神の神光靈明の巍巍として殊妙なることを説かむに、昼夜一劫すとも尚未だ尽すこと能はず。

もし人々がその光明の威光や広大な徳を聞いて、日夜それを褒め称えて信じ、真心をこめて絶えることがなければ、心の願うところに従って天国に復活することができる。宣伝使、菩薩、清徒や声聞の聖者達のために、(伊都能売の大神を) 褒めたたえてその洪徳を称えられるなら、その後には覺りを開いた時、今私が伊都能売の大神の光

明を称えたようにすべての世界の諸神諸仏、宣伝使、菩薩に光明は称えられるであろう。伊都能売の大神の神光の気高く尊いことは、きわめて長い時間昼夜を通して説いてもなお説き尽くせない。

- 【稜威】尊厳な威光。威勢の鋭いこと                      【洪徳】溢れるほどの大きな徳（めぐみ。神仏の加護）  
【称説】ほめて言うこと                      【信奉】ある思想・教理などを信じ尊ぶこと                      【心意】こころ。精神  
【歎誉】褒め称えること                      【成道】〔仏〕成仏得道のこと。仏の悟りを完成すること                      【内覚】内面の悟り  
【三界】〔仏〕一切衆生の生死輪廻する三種の世界、すなわち欲界・色界・無色界。衆生が活動する全世界を指す  
【十方】四方（東・西・南・北）と四隅（北東・北西・南東・南西）と上下。すなわち、あらゆる場所・方角  
【靈明】靈妙で明哲なこと、そのさま。靈力を備えかつ明るくくもりのないこと。  
【巍々】本来は山の高く大きいさま、福德の高いさま、おごそか、神々しい、気高い、  
【殊妙】特にすぐれていること                      【劫】きわめて長い時間の単位。多く宇宙の生滅などについていう。

(五)

爾今の諸天人および後世の人びと、神明仏陀の神教経語を得て当にたつたつた之を思惟し、よく其の中において心魂を端し、行為を正しうせよ。瑞主聖王、愛善の徳を修して、その下万民を率ひ、うたた相神令して、おのおの自ら正しく守り、聖者を尊び、善徳者を敬ひ、仁慈博愛にして、聖語神教を遵奉し、敢て虧負することなく、まさに度世を求めて、生死衆悪の根源を抜断すべし。まさに天の八衢、三途無限の憂畏苦痛の逆道を離脱すべし。

この後天人や後の世の人々は神や仏の教えを聞いてよくよく思いを巡らし、この世の中にあつて心を端し、行いを正しくしなさい。君主は愛善の徳を修め、大衆を導き、つぎつぎと神のいいつけを伝えて各自がその戒めを守って聖者を尊び、善徳者を敬い、広く人々に愛情を注ぎ慈悲の心を垂れて、聖言や神の教をよく守り、決して背くことがあつてはならない。そして覺りの世界を求めて、迷いの世界に止まる原因を断ちなさい。天の八衢や地獄、餓鬼、畜生の無限の苦痛の世界を離れなさい。

- 【爾今】今より後。この後。以後                      【神教経語・聖語神教】神の教え  
【端】きちんとしていること。正しいこと。                      【転】程度がはなはだしく進んで、常とちがうさま。ますます。ひどく  
【神令】令：命ずること。いいつけ。のり                      【虧負】そむきそすること  
【渡世】迷いの世を渡ること。解脱。世間の苦しみから脱すること。生業  
【生死】迷いの世界や流転の姿を現す言葉。迷いの生活。                      【衆悪】様々の悪。多くの悪。  
【抜断】根底から自らの力で断つこと。                      【憂莞】うれえ、恐れる気持ち。                      【逆道】三塗の道、五悪五痛などの道。

(六)

爾等、是において広く愛善の徳本を植ゑ、慈恩を布き、仁恵を施こして、神禁道制を犯すこと無く、忍辱精進にして心魂を帰し、智慧証覚をもつて衆生を教化し、徳を治め、善を行ひ、心魂を浄め、意志を正しうして、斎戒清浄なること一日一夜なれば、則ち無量寿の天国に在りて、愛善の徳を治むること百年なるに勝れり。いかんとなれば彼の神仏の国土には、無為自然に、皆衆善大徳を積みて毫末の不善不徳だも無ければなり。此において善徳を修め信真に住すること十日十夜なれば、天国浄土において愛善の徳に住し、信真の光明に浴すること、千年の日月に勝れり。それ故如何となれば、天国浄土には善者多く、不善者少なく、智慧証覚に充たされ、造悪

の<sup>よちそん</sup>余地存せざればなり。

あなたたちは広く愛善の徳を育て、慈しみを広く施し、神の戒めを破ってはいけない、よく耐え忍んで努め励み心一つにして、智慧証覚をもって人々を導き、すすんで徳を積み善い行いをし心を洗い流し、意志を正しくして神の戒めをわずか一昼夜でも清らかにたもつなら、それは無限の命を保ち、天国で百年間善い行いに励むよりもまさっているといえる。なぜなら、神仏の国土はさとりになかった世界であって、だれでも多くの善い行いをすることができ、まったく悪のないところだからである。またこの世界で昼夜十日間善い行いをし、信真(真の信仰)に住まうなら、天国浄土で千年間愛善の徳と信真の光を浴びるよりも、さらにまさっているといえる。なぜなら天国は、善い行いをするものが多く悪い行いをするものが少ない、智慧証覚がおのずからそなわり、悪を犯すことのない世界だからである。(悪を犯す余地のない世界)

【植ゑ】他から移して育つようにする。今までなかったものを、定着させ<sup>発展</sup>させるようにする。

【布く】一面に物や力を広げてすみずみまで行きわたらせる意。物を平らかにのべひろげる

【慈恩】いつくしみの恩。あついなさけ 【仁恵】いつくしみ。めぐみ。なさけ

【神禁】<sup>しんきん</sup>《神の戒め?》 【道制】<sup>だうせい</sup>(教えの掟?)で戒律か

【忍辱】[仏] 六波羅蜜の一。もろもろの侮辱・迫害を忍受して恨まないこと。忍耐

【帰一】異なった事柄が結果的に一つにまとまること 【教化】[仏] 衆生を仏道へと教え導くこと

【心魂】こころ。たましい。精神

【智慧証覚】智慧は人が生れ乍らにして神様から与へられたもので、即ち先天的、内分的、神的存在である。それで学問がなくても智慧はある。学問があつても智慧の働きのないものもある、外分的後天的の学問その他で出来たものは知識であつて智慧とは違ふ、仏教等でいふ善知識といふのは外分的の記憶的知識で、真の心の救ひとなるものではない。智慧の智とは日を知る(ヒジリ)、靈《ひ》を知る、神を知るといふ事であつて、慧とは天と地との主の神に従ふ心である。

証覚とは覚りあかす、あかしを以て神を覚るといふ事である、日の昇り工合で大抵今は二時頃だといふのも覚りであるが、時計を見て何時何十分何十秒だつと覚る事が出来るやうに、あかしを以て宇宙の真理に徹する事が出来るのが証覚である。靈界物語でたとへたならば、之を出されるのは智慧からであつて、之のあらはれ即ち口述してつけとめられたものは証覚なのである。故に靈界物語は智慧証覚を得る唯一のものである。真善美愛は其証覚より顕はれ出づるものである。それで証覚は理解ともいへる。智慧は本体の様なもので、証覚は働きの様にもなる。仏の云ふ無上正覚とは正しく覚るの意にて、証覚とは違ふのである。(大正十四年一月号 神の国誌)

【齋戒】(「齋」は心の不浄を浄める意、「戒」は身の過ちを戒める意) 飲食・動作を慎んで、心身を清めること

【無量寿】[仏] (梵語 Amit yus 「無限の寿命を持つもの」の意)

【修める】言動をととのえ正しくする。物事をきちんと行う。

(七)

ただ自然界、即ち現界のみ<sup>あくごふ</sup>悪業多くして、<sup>かむながら</sup>惟神の<sup>だいどう</sup>大道に<sup>はいはん</sup>背反し、<sup>ごんく</sup>勤苦して<sup>ぐよく</sup>求慾し、<sup>うた</sup>転た<sup>あひあざむ</sup>相欺き<sup>しんこんつか</sup>心魂疲れ、<sup>きやうたいくる</sup>形体困しみ、<sup>くすぬ</sup>苦水を<sup>の</sup>呑み、<sup>どくせん</sup>毒泉を<sup>く</sup>汲み、<sup>がいしよく</sup>害食を<sup>くら</sup>喰ひ、<sup>ごと</sup>かくのごと<sup>そうむ</sup>くとして、<sup>いま</sup>未だ<sup>かつ</sup>嘗て<sup>ねいそく</sup>寧息すること無し。

ただこの自然界、即ち現界だけが悪が多くて、惟神の道に背き 苦勞して欲望を満たそうとし、互いに欺きあつて心は疲れはて、苦(水)や毒(泉)を飲み害を食らって暮しているようなありさまで、いつもあくせくとして、これまで少しの間も安らいだことがない。

【勤苦】 勤め苦しむこと。労苦

【困しみ】 困る：こまる。くるしむ

【忽務】 世務（世の中の努め）にあくせくすること

(八)

我爾等蒼生の悲境苦涯を哀れみ、苦心惨澹誨諭して教へて善道を修めしめ、器に応じて開導し、神教経語を授与するに承用せざることなく、意志の願ふところに在りて悉皆得道せしむ。

わたしは、お前達たちが悲境にあるを哀れみ、苦心惨澹して教え諭し、善道を行わせ、相手に応じた導き方で、神や仏の教えを授けるのであるから、これを信じて修めないものはない。すべてのものは願いのままに覚りを得るのである。

【悲境苦涯】 悲境も苦涯もともに、かなしい境遇。不運な身の上

【苦心惨澹】 非常に苦勞して心を砕き痛めること

【誨諭】 教えさとすこと。物事の道理を教えさとすこと

【開導】 導き教える。教化すること。

【得道】 道理を体得すること。仏道を修めてさとりをひらくこと。悟道を得ること。得心すること

(九)

聖神仏陀の遊履するところ、国邑丘聚化を蒙らざることなし。天下和順し、日月清明、五風十雨、時に順ひ、十愁八歎なく、国土豊かにして、民衆安穩なり。兵戈用なく、善徳を崇び、仁恵を興し、努めて礼讓を修む。

神や仏が説法に行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれたいところはない。そのため世の中は平和に治まり、太陽も月も明るく輝き、風も、雨も順序よく降り、愁いや嘆き悲しむこと無く、国は豊かになり、民衆は平穩に暮し、武器をとって争うこともなくなる。人々は徳を尊び、慈しみの心を奮いたたせ、あつく礼儀を重んじ、互いに譲りあうのである

【遊履】 衆生済度のために遊行すること。各地をめぐり歩くこと

【丘聚】 人の多く集まる 聚落

【化】 徳を以て教えみちびくこと

【天下和順】 國中上も下もすべてが和らぎあい乱れることがないこと

【日月清明】 日食・月食の異変生ぜず、その他の天体の上の災難のないこと

【十愁八歎】 辞書になし。全ての愁いや嘆きか

【興し】 (衰えたものを) さかんにする。心を奮いたたせる。

【礼讓】 他人に対し礼をつくしてへりくだること。

(十)

我爾等諸天、および地上蒼生を哀愍すること父母のごとく、愛念旺盛にして無限なり。今我この世間において、伊都能売の神となり、仏陀と現じ基督と化り、メシヤと成りて、五悪を降下し、五痛を消除し、五焼を絶滅し、

善徳<sup>もつ</sup>を以て、悪逆<sup>あくぎやく</sup>を改めしめ、生死<sup>しやうじ</sup>の苦患<sup>くげん</sup>を拔除<sup>ぼつちよ</sup>し、五徳<sup>ごとく</sup>を獲<sup>え</sup>せしめ、無為<sup>むゐ</sup>の安息<sup>あんし</sup>に昇らしめむとす。

わたしがそなたたち天人や地上の人々を親のように哀れみ、愛する気持ちは深く無限である。だからわたしは今この世界で伊都能売の神となって、仏となって現れ、キリストとなり、救世主と成って、五悪を打ち負かし、五痛を取り除き、五焼をすべてなくして、善をもって悪を攻め滅ぼし、迷いの世界の苦しみを抜き去り、五徳を得させて、安らかなさとの世界に至らせるのである。

【哀愍】 悲しみあわれむこと

【愛念】 非常にいとしく思うこと。深く愛する気持ち

【五悪】 五悪を解釈するのに二通りあり、浄土宗は不殺生・不倫盗・不邪婬・不妄語・不飲酒の五戒に背くことを五悪とする。真宗は五善を仁・義・礼・智・信の五常ととり、五悪はその五常に背くことと解する。しかし、中国仏教以来、不殺生などの五をそれぞれ、仁・義・礼・信・智に配当して、五常と五戒は異名同義だと考える説も行なわれた。五悪の反対は五善。

【降化】 悪心を降伏・教化すること。

【五痛】 五悪を犯したことによって、現世において、王法の罰をうけること。五痛の数についてであるが、五悪に対して五を用いており、五種を一々数え挙げていない。五痛の反対は福德。

【五焼】 五悪を犯したことによって、来世において、三悪道に落ちて大火に焼かれる苦しみをうけること。五焼の反対は度世・生天・長寿・泥洹《涅槃に同じか》の道。 【五徳】 五善を修めてえた五つの功德。 【無為の安き】 無為捏輿の安楽。

(十一)

瑞<sup>ついでいよ</sup>靈<sup>さ</sup>世<sup>のち</sup>を去<sup>しやうどうやうや</sup>りて後<sup>めつ</sup>、聖<sup>そうせい</sup>道<sup>てんぎ</sup>漸<sup>な</sup>く滅<sup>な</sup>せば、蒼<sup>ごつう</sup>生<sup>が</sup>詔<sup>せう</sup>偽<sup>かへ</sup>にして、復<sup>ほう</sup>衆<sup>しゆ</sup>悪<sup>じやく</sup>を為<sup>これ</sup>し、五<sup>ご</sup>痛<sup>う</sup>五<sup>ご</sup>焼<sup>じやく</sup>還<sup>かへ</sup>りて前<sup>まへ</sup>の法<sup>はふ</sup>のごとく久<sup>く</sup>しき<sup>き</sup>を経て、後<sup>ご</sup>転<sup>てん</sup>た劇<sup>げき</sup>烈<sup>れつ</sup>なるべし。悉<sup>しつ</sup>く説<sup>せつ</sup>くべからず。吾<sup>われ</sup>は唯<sup>ただ</sup>衆<sup>しゆ</sup>生<sup>じやく</sup>一切<sup>いっさい</sup>のため<sup>ため</sup>に略<sup>りやく</sup>して之<sup>これ</sup>を言<sup>ごん</sup>ふのみ。  
爾<sup>なん</sup>等<sup>じら</sup>各<sup>おの</sup>善<sup>の</sup>く之<sup>の</sup>を思<sup>おも</sup>ひ、転<sup>てん</sup>た相<sup>あひ</sup>教<sup>けう</sup>誨<sup>ご</sup>し聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>教<sup>けう</sup>語<sup>ご</sup>を遵<sup>じゆん</sup>奉<sup>ぼう</sup>して敢<sup>あへ</sup>て犯<sup>を</sup>すことなかれ。あゝ惟<sup>かむ</sup>神<sup>むな</sup>靈<sup>が</sup>幸<sup>ら</sup>倍<sup>た</sup>坐<sup>ま</sup>世<sup>は</sup>。  
伊<sup>い</sup>都<sup>づ</sup>能<sup>の</sup>売<sup>め</sup>の大神<sup>おほかみ</sup> 謹<sup>ごん</sup>請<sup>じやく</sup>再<sup>さい</sup>拜<sup>はい</sup>

しかし瑞の御霊がこの世を去った後には、神の教えがしだいに衰えて、人々は偽りが多くなり、ふたたびいろいろな悪を犯して、五痛と五焼の報いをもと通り受けるようになる。それは時を経るにしたがってますます激しくなるであろう。そのようすを一々詳しく説くことはできないが、今はただ、そなたたちのために簡単に述べたのである」

「そなたたちはそれぞれにこのことをよく考え、互いに教えあい戒めあつて、神の教えを正しく守り、決してこれに背くようなことがあつてはならない」 ああ惟神靈幸倍坐世。

伊都能売の大神 謹請再拜

【経道】 仏の教法。

【詔偽】 うそいつわり。

【謹請】 つつしんで勸請（神仏の来臨を請う）す

【五痛】 五悪を犯したことに対する罪報

【五焼】 五悪を犯したことによって三悪道（地獄・餓鬼・畜生道）に堕ちて大火に焼かれる苦しみを受けること。

- (一) 神の中の第一の王である伊都能売の大神の威厳や徳と慈悲の光は最も尊く最も気高く、諸神の光の到底及ぶ所ではない。伊都能売の大神の光は百神の世界や万神の世界を照らす。東方にある日の出の神域を照らし、また、南、西、北、東北、東南、西南、西北の四隅や上も下も総てを照らす。何と盛んなことか。伊都能売御魂と現われたまう厳瑞二霊の大靈光を称して、天之御中主大神、大国常立大神、天照皇大御神、伊都能売の大神、弥勒大聖御稜威の神、大本大御神、阿弥陀仏、無礙光如来、超日月光仏と様々に尊称申し上げるのである。
- (二) 人としてこの神の光に巡り会う者は貪欲、瞋恚、愚痴（貪瞋痴）の三垢を消滅して、身も心も解放されて和らぎ、喜んで躍りあがり、万物総てを愛しむ愛善の真心が生まれる。地獄道、畜生道、餓鬼道の三途の世界にいても、この神の大光明を拝むなら、みな安息を得て一つの苦悩も生じないし、生前死後の区別無く一切を超越して、居ながら安楽境に身を置き、天国の生涯を送ることが出来る。
- (三) この神の光明は明るく輝いて、天地の間の諸神諸仏の国土は照らされてその名の識らないところはない。ただ私だけが神の光をたたえるだけでなく、総ての神や仏、清徒や声聞、求道者、縁覚、多くの宣伝使や菩薩衆はことごとく褒め称え、心から喜んで従がわれるのであり正にその通りである
- (四) もし人々がその光明の威光や広大な徳を聞いて、日夜それを褒め称えて信じ、真心をこめて絶えることがなければ、心の願うところに従って天国に復活することができる。宣伝使、菩薩、清徒や声聞の聖者達のために、褒めたたえられてその洪徳を称えられるなら、その後に見るべき時、今私が伊都能売の大神の光明（智慧や慈悲）を称えたようにすべての世界の諸神諸仏、宣伝使、菩薩のために光明は称えられるであろう。伊都能売の大神の神光の気高く尊いことは、きわめて長い時間昼夜を通して説いてもなお説き尽くせない。
- (五) この後天人や後の世の人々は神や仏の教えを聞いてよく思いを巡らし、この世の中にあつて心を端し、行いを正しくしなさい。君主は愛善の徳を修め、大衆を導き、つぎつぎと神のいいつけを伝えて各自がその戒めを守って聖者を尊び、善徳者を敬い、広く人々に愛情を注ぎ慈悲の心を垂れて、聖言や神の教をよく守り、決して背くことがあつてはならない。そして覚りの世界を求めて、迷いの世界に止まる原因を断ちなさい。天の八衢や地獄、餓鬼、畜生の無限の苦痛の世界を離れなさい。
- (六) あなたたちは広く愛善の徳を育て、慈しみを広く施し、神の戒めを破つてはいけな、よく耐え忍んで努め励み心をつとめて、智慧証覚をもって人々を導き、すすんで徳を積み善い行いをし心を洗い流し、意志を正しくして神の戒めをわずか一昼夜でも清らかにたもつなら、それは無限の命を保ち、天国で百年間善い行いに励むよりもまさっているといえる。なぜなら、神仏の国土はさとりにかなった世界であつて、だれでも多くの善い行いをすることができ、まったく悪のないところだからである。またこの世界で昼夜十日間善い行いをし、信真(真の信仰)に住まうなら、天国浄土で千年間愛善の徳と信真の光を浴びるよりも、さらにまさっているといえる。なぜなら天国は、善い行いをするものが多く悪い行いをするものが少ない、智慧証覚がおのずからそなわり、悪を犯すことのない世界だからである。
- (七) ただこの自然界、即ち現界だけが悪が多くて、惟神の道に背き 苦勞して欲望を満たそうとし、互いに欺きあつて心は疲れはて、苦（水）や毒（泉）を飲み害を食らつて暮しているようなありさまで、いつもあくせくとして、これまで少しの間も安らいだことがない。
- (八) わたしは、あなたたちが悲境にあるを哀れみ、苦心惨憺して教え諭し、善道を行わせ、相手に応じた導き方で、神や仏の教えを授けるのであるから、これを信じて修めないものはない。すべてのものは願いのままに覚りを得るのである。
- (九) 神や仏が説法に行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれなところはない。そのため世の中は平和に治まり、太陽も月も明るく輝き、風も雨も順序よく降り、愁いや嘆き悲しむこと無く、国は豊かに

なり、民衆は平穩に暮し、武器をとって争うこともなくなる。人々は徳を尊び、慈しみの心を奮いたたせ、あつく礼儀を重んじ、互いに譲りあうのである

(十)「わたしがあなたたち天人や地上の人々を親のように哀れみ、愛する気持ちは深く無限である。だからわたしは今この世界で伊都能売の神となって、仏となって現れ、キリストとなり、救世主と成って、五悪を打ち負かし、五痛を取り除き、五焼をすべてなくして、善をもって悪を攻め滅ぼし、迷いの世界の苦しみを抜き去り、五徳を得させて、安らかなさとの世界に至らせるのである。

(十一)しかし瑞の御霊がこの世を去った後には、神の教えがしだいに衰えて、人々は偽りが多くなり、ふたたびいろいろな悪を犯して、五痛と五焼の報いをもと通り受けるようになる。それは時を経るにしたがってますます激しくなるであろう。そのようすを一々詳しく説くことはできないが、今はただ、あなたたちのために簡単に述べたのである。

「あなたたちはそれぞれにこのことをよく考え、互いに教えあい戒めあって、神の教えを正しく守り、決してこれに背くようなことがあってはならない」 あゝ惟神靈幸倍坐世。

伊都能売の大神 謹請再拜

## まとめ

(一) 神の中でも最も尊い第一の神である伊都能売の大神は大きな威厳と人を心服させる徳をお持ちになり、信真の光は最も尊く気高く、他にこの神に勝る神はいない。東方にある日本の神域はもちろん、東西南北や四偶上下、天地の全てを照らされる。

陰陽の神である巖瑞二霊が合一し伊都能売となられて大靈光を放たれるのである。この靈光を称して神道では天之御中主大神、大国常立大神、天照皇大御神、伊都能売の大神、弥勒大聖御稜威の神、大本大御神と尊称申し上げ、仏教では阿弥陀仏、無礙光如来、超日月光仏と尊称申し上げるのです。

(二) この神の光に巡り会えば三垢(貪欲・瞋恚・愚痴)から解放され、三途(地獄道、畜生道、餓鬼道)の世界にいても安息を得て天国の生涯を送ることが出来る。

(三) この神の光明に照らされて、総ての神や仏、清らかな生活を送る人や聖者、多くの宣伝使や菩薩は喜んで心から従がうのである。

(四) 人は神の言葉を聞いて真心から信ずるなら、願い通り天国に復活することができる。また、今私が大衆のために伊都能売の大神の広大な徳を称えるなら、覺りを開いた後に聖者たちは伊都能売の大神の広大な徳を称えるだろう。あゝ、伊都能売の大神の神光の気高く尊いことは、昼夜を通し長時間を費やして語っても語り尽くせない。

(五) 神の教えを聴いた人は愛善の徳を修め、大衆を導き、つぎつぎと神のいいつけを伝えて各自がその戒めを守って広く人々に愛情を注ぎ聖言や神の教をよく守り、決して背くことなく、迷いを断ち切りなさい

(六) よく耐え忍んで努め励み心を一つにして、智慧証覺をもって人々を導き、すすんで徳を積み善い行いをし、意志を正しく持って神の戒めをわずか一昼夜でも清らかにたもつなら、無限の命を保ち、天国で百年間善い行いに励むよりもまさっているといえる。

《この(六)は現世での修行が如何に大切かがよくわかる。本来現世は修行の場であり、天国や地獄は現世の結果として与えられる処です。地獄は現世での悪業の結果として、ほとんど永遠の苦しみを受けるところで、再生し現界にもう一度生まれ変わって修行をしない限り浮かぶ瀬はありません。一方天国は善や徳を積んだ人のゆく処であり、全て善ばかりなので悪を犯すこともなければ、それ以上の善を積むことも困難です。これも現世に生まれ変わって今以上の善徳を積まなければ上の天国には行けません。現界はまさに修行の場であり、永遠の靈魂

から見ればわずか百年ほどの修行で魂を向上させられる大変有難い場所です。今の流行り言葉で言えば、貴方は何時修行するの。今でしょ!》

(七) 現界には悪が多く、惟神の道に背き、欲望を満たそうとし、互いに欺きあって心は疲れはてて少しの間も安らいだことがない。

(八) あなたたちが悲境にいるのを哀れみ、なんとかして教え諭して善道を行わせ、靈性に応じて神の教えを授けるのであるから、これを信じて努力すればすべてのものは願いのままに覚りを得られるのである。

(九) 神が説法に行かれるところは何処でも、その教えに導かれこの世の中は平和に治まり、国は豊かに民衆は平穩に暮し、武器をとって争うこともなく、人々は徳を尊び慈しみの心で暮らすのである。

(十) わたしがあなたたち天人や地上の人々を親のように哀れみ、愛する気持ちは深く無限であるから、今伊都能売の神となり、メシアとなって善をもって悪を滅ぼし、迷いの世界の苦しみを取り去り、功德を与えて、安らかなさとの世界に導くのである。

《ここに伊都能売の教（靈界物語）を信奉すれば、必ずや天国に導かれます。》

この神仏無量寿経は言霊別の化身である梅公宣伝使が唱える神（経）文です。敵瑞二靈が合一して伊都能売の御魂となって顕現されて神光（教）を照らされます。その教即ち靈界物語を聴き、実行すれば三垢や三途の苦から解放され、おのずと天国に救われることを教えています。これに似たのが仏説無量寿経です。

「照国別の宣伝使の従者、ハルナの都の言霊戦に従軍した梅公は大神より特にえられた神柱で無限の秘密を蔵し神妙密門の鍵を授かり宇宙間一の恐るるもの無き神人であった。彼の行くところ百花らんまん咲きみち、地獄はたちまち天国と化した。他の宣伝使のごとく千言万語をついやするの要なく、さしも兇悪なヨリコ姫らの一派を翻然として悔悟せしめた英雄である。」【靈界物語資料編より】

(十一) 最後の部分『しかし瑞の御霊がこの世を去った後には、神の教えがしだいに衰えて、人々は偽りが多くなり、ふたたびいろいろな悪を犯して、五痛と五焼の報いを、もと通り受けるようになる。それは時を経るにしたがってますます激しくなるであろう。そのようすを一々詳しく説くことはできないが、今はただ、衆生のために簡単に述べたのである。』この部分は特に心しなければいけないところです。

ここは、正に現代社会を預言したものです。世界の状況は五六七の世とは正反対の方向に進んでおり、世界どころか、神州日本もわれよし、強い者勝ちの弱者を返り見ず、政治家や実業家を始め多くの上に立つ人が、目先の利益だけに目を向け、将来をと口にしますが、その実全く考えていません。大人から子供に至まで、自分だけ金と食に目が行き、狂乱の悪魔社会となっています。

そして、「そなたたちはそれぞれにこのことをよく考え、互いに教えあい戒めあって、神の教えを正しく守り、決してこれに背くようなことがあってはならない」と結ばれています。今この九十年前に出された靈界物語こそが「神の教え」で救いの書です。これを勉強し正しく守って行かなくてははいけないとつくづく感じました。なお、現代語は仏説無量寿経（岩波文庫）を参考に試みました。

## 参考

仏説無量寿経とは『仏教諸教典のうちで日本人一般の心に最も深く感化を及ぼしたものは、恐らく浄土三部経であろう。浄土教は日本仏教のうちで最も多くの信徒を持っているし、浄土教以外の諸宗派でも浄土教から直接間接に多大の影響を受けている。かなり多くの日本人に認められる謙虚で誠実な心情は浄土教とは無関係ではないであろう。その浄土教の根本教典が浄土三部経なのである。